

ソビエトの第9回 国際老年学会議



I 会議の概略

第9回国際老年学会議は、1972年7月2日から7日まで、6日間にわたって、ソビエト連邦ウクライナ州キエフ市で開催される。

この会議は、1950年にベルギーのリージュで第1回国際老年学会議として発足し、1951年に第2回の会議がもたれ、それ以降4年毎に開催されるようになっていく。

第1回会議から第3回会議までは、発表内容が主として生物学、臨床医学に関するもので占められ、社会科学に関するものはきわめてわずかであった。しかしながら、1957年7月にイタリアのミラノで第4回会議が開催さ

れたときに、社会科学に関する研究の重要性が認められるようになり、社会科学研究委員会がこの会議の新部会となった。さらに、1960年8月にアメリカのサンフランシスコで開催された第5回会議で、社会科学の応用的側面として、あらたに Division of Social Welfare が新部会として設置され現在にいたっている。

今回の会議は、特に老化の本質を生物学、臨床医学、社会科学の各側面から明らかにしそれぞれの専門領域の人達によって討議を加え、老人の社会適応に関する諸問題を解明しようと試みている。

II 討議の内容

第9回の会議は、本会議、シンポジウム、Interdisciplinary シンポジウム、分科セッション、Interdisciplinary 分科セッションで構成されている。

本会議

1. 老化の本質に関する現代概念
2. 老化における機能の調整と適応過程
3. 老化の臨床生理学的、心理学的特質と老年病
4. 生活様式と老化

シンポジウム

〔生物学〕 諸動物老化に関する比較研究
ほか7

〔臨床医学〕 薬物治療の諸原理ほか4

〔社会科学〕 老人の分布図ほか8

Interdisciplinary シンポジウム

生物学的年齢およびその決定ほか10

分科セッション

〔生物学〕 核酸と老化ほか 8

〔臨床医学〕 神経系統の疾患ほか11

〔社会科学〕 健康と老人ほか16

Interdisciplinary 分科セッション

中枢神経系統ほか18

Ⅲ 日本からの参加

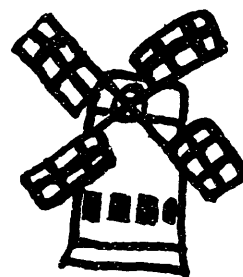
この会議には、日本から生物学、基礎なら
びに臨床医学、社会科学等の研究者が約60名

参加する予定になっている。

なお、日本から参加する研究者は、この会議に出席し、討議に加わった後、1958年にソビエト連邦の Academy of Medical Sciences によって創立されたキエフの老年学研究所やアナハージャ自治共和国（コーカサス山脈の西端）にある、有名な長寿村等を訪問する予定になっているので、各方面にわたり実りの多い成果を得られることと期待されている。

（小寺清孝 東京都老人総合研究所）

オランダの第16回 国際社会福祉会議



第16回国際社会福祉会議は、1972年8月13日から19日まで、オランダの首都ハーグで開催される。隔年ごとに開催されるこの会議は、前回のマニラ会議について70年代における2回目の会議であるが、今回はとくに、西欧—東欧（含ソ連）の雪どけ、拡大ECの発足

等流動化の激しいヨーロッパで開催されるとあって、その意義は大きい。

テーマも「急速な社会変動下における社会福祉政策（social policy）の展開—社会福祉の役割」と銘打たれ、興味深い。隔年ごとの国際会議という性格上、後記するように、極

めて広範な内容を含んでいるので、鋭い問題意識で会議を集約することは、決して簡単なことではないだろう。

周知の通り、主催団体である国際社会福祉協議会（略称=ICSW）は、国連経済社会理事会、ユネスコ、ユニセフ、WHO、ILO、FAO、EC、汎アメリカ連盟などの国際団体機関に対する諮問的立場にある常設の国際的民間団体である。しかし、その基本的構成単位である63ヶ国の国内委員会及び加盟国際団体に、社会主義国が殆んど入っていない現実、最近の国際社会の急速な変動にかんがみて、今後の大きな問題のひとつになるだろう。会議の形式は、大体従来通りであるが、より多くの参加者が積極的に会議に参加できるように、前回のマニラ会議で改革された、指定部会・公開部会という二段構えの国際交流部会が、今回も予定されている。

主な会合の構成、機能及び討議テーマは、次の通りである。尚、総会以外の各会合は、同時に並行して開催される。

1. 総会

開会式、閉会式を含んでおり、会議の大枠